三井本館の前で総決起する遺族の斗いを 全組合員のものに

「正常化」交渉が妥協いらい八月一一日、二〇日、二五日の方別ストライキおよび宮浦労組の組夫導入反対の一時間五〇分の時限ストライキを併用して実施した。

組合は八月一日以来の遺族座り込み斗争をさらに組合員の要求として斗うことはもちろんのこと座り込みについても主婦会が福極的に斗う組み、とちれば支援激励という形、かまえから一歩前進して、全体的な斗いとする意志統一決起大会を八月二三日、就業者以外の全組合員、主婦会員参加のもとに本社構内で開催し遺族座り込みについては業務妨害として会社の管理権が侵害されているので、ただちに撤去せよ」との掲示を行い、実力で座り込み者を排除する態度をみせた。

組合、遺族代表はただちに本社会議室において大沢人事部長、山家労働課長代理、吉田管理係長に対し激しく抗議し、翌日会社の高巻部が「退席」と「明末手当粉争」の解決のための交渉をすることを約束し午後八時に議会終った。

二八日午前一一時より霧島旅館において会社側大沢人事部長ほか三名の幹部、組合側は炭原書記長、主婦会会長、遺族代表団一〇名が出席し話しあいがすすめられた。

組合側としての、通告もしないで一方的な「掲示」「立入禁止札」についてと、期末手当支払についてなどの問題提起に対して、社長命令とか中央協定という独善的姿勢や、三池災害の異常な配慮ということはいささかも口に出さないで冷たい会社側の態度に、四五人余の大量殺人事件だということについての問題である生の苦しさと事件発後会の会社の冷たい態度とは生涯要求と抗議を誓う。二三日の遺族代表者との交渉で鳥瀬所長は「会社の取扱いを承い目でみて理解してくれ」というたにもかかわらずその第一次回答が、本館から出て行けとは何事か。

遺族代表者たちの、それぞれあり目の笑や手ぶりのことを思いうかべながらの「人間としての訴えに、あくまさよくな会社幹部も、ついに午後五時三〇分たいり、稲田次長が上京して二遺族代表者の要求についてはが分本店に伝え問題解決のための努力をする」ことを約束した。

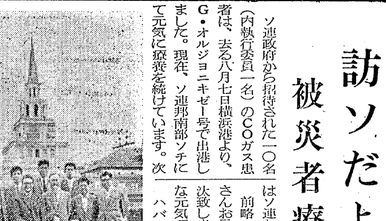
▼日時＝九月一九日、二〇日

三井本館前で〝命を守る斗い〟を更に強化する決意を表明　（8月25日）

訪ソだより　被災者療養団

ソ連政府から招待された二〇名（内執行委員一名）のCOPAS団者は、去る八月七日横浜港を出G・オルジョニキゼー号で出港しました。現在、ソ連南部ソチにて元気に療養を続けています。次は、ソ連からの第一便です。

前略　宮浦、田中、静枝さんお元気ですか。永い間御無沙汰致しました。私たち一〇名はハバロフク港を八月一〇日午



ソ連炭労中央委員 のアナトリさんとともに（モスクワ駅を背景に）

新盆を迎えて

宮浦　田中　静枝

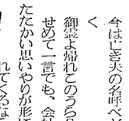
いく度かの苦しい斗を乗り越えて、労働者の生活と権利を得る為、長いたたかいをつづけた。そのはね返りは差別となって表われました。

差別／また差別!!いやそれのみではない。出炭／出炭!!人命を犠牲よりかるべ／あしちった会社。

保安を無視し、働く者の健康・要求ちんすず、憎り殺人的な方。それ以上の労働強化。あの三川鉱の大爆発。阿鼻叫喚の地獄図。天なだろうか。

天災と一口に折たんべしまった会社。原因ちと明らかにしないまま、あれからいく月経過し、初盆を迎えようとしている。

新盆を前に迎えて抗議する妻の怒りに胸の炎をかかる。次々におちるなみの数多く



いとし子かなら涙くるるも亡き英の命帰すと幾度かコンクリートに座り込で妻座り込むは小の膝根に泣きぬいとしき夏子の安らかとねる

今は亡き英の名呼べど返せめて一言でも、会社のあたたかい思いなりが形に表われてくるならば、涙とともにくまれる遺族なのに、遺族とともに夜遺族とともに夜語りあかす日々のただ口の端に出るのは、ありし日の元気な夫や子どものことのみです。

このような遺族の座り込みに耳をかた向けぬ会社の態度資本家とは、このようなものだろうか。思い新たに悲みと憤りみに、激しく立ち向う遺族!!帰り来る人とはいえ、今一度命を力えず呼び、力次々におちるなみの数多いにちかいあい今宵もふける

日本母親大会　成功裡に終了

ことしも母親のねがいを結集して第一〇回母親大会が八月二三日から二日間、東京で盛大に開ちかれました。

三池では坂場における組合員の斗いをたすけ励まし、なかでも八月一日以降三井本社に「緊急要求」をつづける遺族を中心とした闘争の活動、罷災者の家を訪ね、生活苦のなかでたたかう主婦の姿を全国の主婦に訴え、さらにたたかいをみなげることはわれわれの任務です。そのため主婦会は、後七時出機致しまして、モスクワ空港に当日の午後九時に着機致しました。（飛行時間は約九時間時差があります）モスクワ時間午後九時は日本時間とすれば八月一日午前四時か五時ごろではないでしょうか。機中はみんな元気でした。

ホテルはモスクワ市街のほぼ中心地にあるレーニングラツカイヤホテルで、二名一組で各部屋に休憩しています。（岩本＝佐藤、中村＝吉田、猪川＝坂田、井上＝萩島野中＝緒方）の五組に別れています。

八月一一日は午前中全員、私も含めて健康診断、全員健康良好、午後は少連炭労議長への挨拶面談（三池、三川と聞いたけど大変喜んでくれました。その喜びぶりは、私たちが想像していた以上でした）また石川組合員は、全労働者によろしくといっていました。三池には女たちも多くいるともいいました。八月一四日午前九時、モスクワ空港を出機し、療養地ソチに参ります。

それから、モスクワ市地区の気候は、ただいま日本の（2月下旬くらいの気候）ではないでしょうか？（気温二二～一五度くらいです）

三池の労働者（組合員）家族の皆さん方の御健斗を お祈り致します。

S三九・八・一三

宮川組合長、執行委員
組合員、家族　殿

ソ連炭労者一同

責任者　橋本　博章

追伸　八月一三日午前九時、私たち一〇名は、九州・三池の空をあおぎ、合理化にタオルを労働者の同志たちに「もくとう」をさけました。八月一五日ではソチ療養地々よりさらに御伝言致します。

被災者（入院・通院）遺族の皆さん方によろしくお伝えください。

日本母親大会　成功裡に終了

労働者の新らしい連帯の模索とは、一口にいって各自の胸にいかにして「やる気」を構築するかということである。

「やる気」の構築は、一部の人がいうように、マルクス・レーニン主義の徹底的な学習によってのみ、自己変革も、頑強な連帯性の確立も可能であると決めつけることで、こと足れりとするのは浅はいる。

私が問題としたいのは、徹底的な学習に立ち向かう以前の問題である。

強大な内外に跨っている組織が、三井斗争の最中に分裂し、現在三千五百対六千五百という勢力分解で対峙し反目し合っている状況のもとで労働者の連帯の問題を考えて見ようと思うのである。

組合結成以来一八年、たたかい の経験を正しく受けとめ、これを消化し、活力を造型する糧を構築することを拒んできたものが、われわれの中に確かに根を張っていた。

こいつは、窓からとび出そうとする思考を引き戻し、正義に燃えそこなうとする高熱に水をぶっかけ、強力な求心力として作用しているいる。

こいつはわれわれの胸の中に閉じこめ、疑惑と不信の網の目を張りめぐらせ、敏感に目のフタを固く閉じてしまう。

われわれの胸の奥にうずまっている、この頑固な利己心を切開手術でひきだし、頑丈なその構築をつき崩し、貝のフタをこじ明けなければ何もはじまらないのである。

不毛の殻の中に閉じこもり、硬を固く締めている姿勢では、軍風が西風を圧していく情勢や、合理化の激化は、敵のあがきであるということもえず、抵抗とを労働者の生活と権利を守るものであるという基本理念も、馬耳東風の身につかないのである。

そこでは階級の意識が、例えば一プラス一は二であるというように、どう考えてみてもそうとしか考えられない、というところまで高められない、社会用のアクセサリーとして、必要に応じ出し入れする道具に過ぎなかったりする階級のたたかいに自己の「生」を据えるという姿勢、つまり主体的にとらえられていない。

利己心は、生命の維持存続に根を張っている。それ故に根元的なものを「私」の中に持っている。そしてこの力を強固にし、頑固なものにしているのが、生活を困難なものにしている社会的条件なのである。生存競争を生み、生きる姿勢の転倒を強要し、男子二度立ては七人の敵ありという格言となる。さらにまた肉体の構造にも起因している。肉体は自身の構造のために苦痛の姿をまとっている。この苦痛の感覚が強烈さが利己心をすると拝金主義を生み、生きる姿勢の転倒を強要し、男子二度立ては七人の敵ありという格言となる。さらにまた肉体の構造にも起因している。肉体は自身の構造のために苦痛の姿をまとっている。この苦痛の感覚が強烈さが利己心をすると拝金主義を生み、こぬぼと、さび色の落葉でおおわれていて、あるく足前にかわいた音をたてる、きなくさい枯葉の匂いをただよわせた。

西脇巡査と向井助手は、ボールを脇にかかえたまま、意識的に足先で落葉をけちらし、ゆっくりとつっし重かった。

「ねえ、どのくらいひろった？」

助手は巡査におそそって聞いた。

「二升ぐらいだろうなあ」

巡査はボール箱を肩にかけて見せ、満足ように微笑した。どんなりは漁具店にもっていくと、一升四十円くらいに売れた。

「やはり巡査さんのが、多かよ」

助手は巡査いろいろながら、ふっとその自分の言葉のなかに擬態を感じて、巡査のなかにも、そんな落皿でないものがある気がした。つまり、どんぐり拾いは目的ではなくて、手段だったんじゃないかなあ」

巡査はそのような気がするのである。

だから満足そうな巡査の表情にも、敗北をみつめる自分の言葉にも、実感のもっ迫力が伴はないのではないか。

そう考えると、助手は、巡査に背をむけて遠い街を見ながらひとり笑いをした。隔絶された二人きりの世界で、のびのびと遊ぶために、どんぐり拾いを思いついたのである。助手は巡査を、そんな自分の内部に気づいていても、それを相手にしられるのはいやだし、恥しかった。そのひそかなたのしみをつづけていくためには、すこし気がとがめても「擬態」をつづけていかねばならなかった。

薬のない植林が消え、木の葉のようにメジロの群がわたっていった。

助手は、跳ねるようにしてあるくと、もう二人の住んでいる「緑が丘集団社宅」の社宅のうえに腰をおろすと、朝野は、肩から水筒をはずした。水は底分方でかるい音をたてていた。

「ねえ、巡査さんの、ないんでしょう、これ飲ん？」

「朝野さんものこがわいたんだ」

中央の人福炭婦協会長北幸子さん（全国会長兼任）於飯塚福炭労前にて　（九炭労前身）

主婦会十二年

六三ストの想い出（2）

五島　頼子

組合へ激励に行く

こうして昭和二七年秋の賃金斗争は炭鉱業連盟と炭労との、かつてない激烈な労闘係の中で長期にわたる斗いとなりました。

社宅の中でも地域分会や婦人部を中心として活発な座談会が開かれるようになりました。

二人が住む「青葉町」は、その一つの丘の中腹で、すぐ向いの社宅群の密集、一つの街を形成している「緑が丘社宅」へ、笑談しながら坂道をおりていった。

桧、楓、桂、すみれ、青葉、ひまわりなど、緑が丘社宅の町々には、植物の名が多くつけられているが、現実は西部の映画にでもでそうな、赤ちゃけた丘に、古びた板囲いの長屋が密集しているだけで、その植物の名は、どんな意味でも町を表徴してはいない。

二人の住む「青葉町」は、そのような激烈な労闘係の中で長期にわたる斗いとなりました。

社宅の中でも地域分会や婦人部を中心として活発な座談会が開かれるようになりました。

その頃の一五日までは、そのうちの一人が、一二月一五日の給料日に、いつもの半分足りの給料を受けとった主婦たちの間には、さすがに不安が動揺がうえまして。前回までは、三月支部の